

建築と庭園における意匠心

—— 森蘊と谷口吉郎の修学院離宮意匠論 ——

The mind of design in architecture and garden

—— The design theory of Shugakuin-Rikyu of
Mori Osamu and Taniguchi Yoshiro ——

田 中 栄 治

キーワード：建築、庭園、意匠心、森蘊、谷口吉郎

要 旨

本稿では、日本庭園研究者で作庭家の森蘊と、東京工業大学教授で建築家の谷口吉郎のそれぞれの修学院離宮意匠論を考察し比較することにより、彼らが建築と庭園の造形において作者達の意匠心をどのようにとらえているのかを探った。まず、森と谷口の研究面での交流について整理した上で、著書や対談などから主に谷口が「意匠」あるいは「意匠心」についてどのように考えていたのかを確認した。そして森と谷口の修学院離宮意匠論には、その場所に以前からあったものを最大限に活かしていることや、三つの茶屋が分散しながら一体となり、それでいて異なった意匠となっていることなどに作者達の意匠心をみている点が共通していることがわかった。一方谷口は、足音や水音などの音という環境面や、何気ない簡素な造形之美、建築と庭園の結びつきなどに、建築家としての独自の視点から作者達の意匠心をみていることがわかった。

1. はじめに

前稿(田中 2017)では、日本庭園研究者で作庭家の森蘊と、建築家の堀口捨己・西澤文隆のそれぞれの桂離宮意匠論を比較することにより、彼らの建築と庭園の結びつきの視点がどのようなものであったのかを探った。まずは、彼ら以前の岸田日出刀、ブルーノ・タウト、柳亮、藤島亥治郎らの桂離宮意匠論に建築と庭園の結びつきの視点がみられるのかを確認した。その結果、特に藤島亥治郎が1945(昭和20)年に出版した『桂離宮』のなかで、桂離宮の美は建築と庭園のまとまりにあるとし、「これは注目すべき重要事であるが、桂の御庭が極めて建築的であることである」(藤島 1945 p.124)と指摘しており、藤島の桂離宮意匠論に建築と庭園の結びつきの視点がみられることがわかった。その後、森は藤島の『桂離宮』を通じ啓発されるところがあったとし、建築と庭園の結びつきの視点を大きく分けて「建築と庭園の関連的合理性」「庭園における建築的意匠」とし、さらに「庭園における間仕切の存在」に言及して建築と庭園の結びつきの視点をさらに発展させていた。堀口は、建築家として写真を通して建築と庭園の結びつきの視点からみた桂離宮の建築と庭園の美を見出していた。西澤は、森の考え方をさらに

発展させ、建築と庭園の結びつきの視点から桂離宮の敷地全体を生活のための空間として建築的に捉えていた。これらにより、昭和初期の桂離宮意匠論では建築と庭園の結びつきの視点についての具体的な考察には至っていなかったが、戦時中に桂離宮の庭園を建築的であるとする藤島の桂離宮意匠論が出てきて、戦後の森や堀口・西澤らの建築と庭園の結びつきの視点による桂離宮意匠論に発展していったことがわかった。そして、そこには日本庭園研究者・作庭家と建築家の間に研究上の交流があったことがわかった。

本稿では、森と交流のあった建築家の谷口吉郎（田中 2016）について、それぞれの修学院離宮意匠論を考察し比較することにより、森と谷口が修学院離宮の建築と庭園をどう捉えていたのか、さらに日本庭園研究者・作庭家と建築家の間の研究上の交流についてみていくこととする。そのときに、本稿では「意匠心」がキーワードとなる。

2. 森蘊と谷口吉郎の交流

谷口吉郎（図1）は1904（明治39）年生まれ、森蘊（図2）は1905（明治38）年生まれの1歳違いの同年代である。森と谷口の経歴については以前に既に記している（田中 2016）ので、ここではふたりの「意匠心」につながる東京工業大学での交流について整理し直しておく。

東京工業大学は1929（昭和4）年4月1日に設置され、谷口は1930（昭和5）年度に建築計画担当の講師に着任し、1931（昭和6）年度には助教授となった。1931（昭和6）年度以降の谷口の担当科目は、建築意匠・衛生工学（のちに建築衛生）・設計及製図第一・同第二・同第三であった。また、1936（昭和11）年度より伊東忠太とともに建築史も担当するようになる。谷口は1943（昭和18）年度より教授となった。

当時の東京工業大学および同建築学科の研究教育理念は独創力が大切に考えられていた。そのために東京工業大学では、根本の学理に重きを置くと同時に実地にも重きを置き、実地問題に対して理論的実験的研究を通して実際的方法をもって討究するとしていた。特に建築学科では建築計画分野について各種の理論的・実験的研究が進められ、その結果として合理的な建築を実現することが求められており、そのなかで谷口は建築計画分野の一員として期待されていた。

一方、森蘊は前田松韻の研究室に出入りすることにより東京工業大学と関わっていた。東京帝国大学農学部農学科の学生であった森が東京工業大学の前田研究室に出入りするようになった時期は、1932（昭和7）年に北村耕造^{注1}と前田の紹介によ

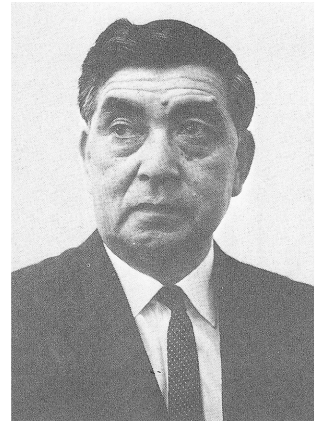


図1 谷口吉郎
（谷口 1974 p.9）



図2 森蘊
（森蘊門下生一同 1989 口絵）

り日本建築学会に入会していることなどから、1931（昭和6）年夏以降から1932（昭和7）年までの間のことであると考えられる^{注2}）。この時期は、谷口吉郎が東京工業大学の講師になった翌年であり、谷口が助教授となって本格的に東京工業大学で教鞭をとるようになっていた。また、1932（昭和7）年には谷口の設計による東京工業大学水力実験室が竣工している。森は1932（昭和7）年の大学卒業後に東京帝国大学大学院に進学し、さらに内務省衛生局に勤務しながら研究を続けるが、1937（昭和12）年には自宅を東京工業大学まで500mほどの目黒区宮ヶ丘に移したことにより、前田の研究室を訪ねて指導してもらう機会が増えたとしている^{注3}）。この時の前田研究室には東京工業大学卒業生の藤岡通夫が講師をしており、森は前田とともに藤岡とも交流することになる。この当時、谷口は東京大学航空研究所で「建築物の風圧に関する研究」をはじめており、谷口が設計した慶応義塾幼稚園舎校舎が竣工している。また、谷口は翌年の1938（昭和13）年10月から1939（昭和14）年10月まで外務省嘱託としてドイツに出張し、シンケルの古典主義建築を体験してくる時期にあたっている。なお、1938（昭和13）年に森は足立康と大岡実が主催していた建築史研究会に大岡と福山敏男の推薦で入会している^{注4}）。

さらにこの時期、森は桂離宮の研究をはじめているが、それにも前田が関係している。森は、東京工業大学での前田との交流を通して、その後の重要なテーマである桂離宮の建築と庭園の結びつきについての復原的研究に取り組むことになる^{注5}）。そして、この研究が後に森が東京工業大学に提出する学位請求論文『桂離宮の研究』につながることになる。このように、昭和初期の森は、内務省・厚生省・東京市での勤務のかたわら、日本建築学会や建築史研究会に所属して研究を続けながら、同時に東京工業大学の前田研究室に出入りし、前田や藤岡との交流を通して建築と庭園の結びつきという研究テーマを深めていった。そして、それは谷口が東京工業大学での研究・教育のなかで生涯を通して追求していくことになる「清らかな意匠」の基礎を築いていった時期と重なっている。さらに後年、森は1960（昭和35）年発行の『日本の庭』のなかで、「昭和十年頃から後、殊に終戦後の庭園界の特色として、農林関係の出身者よりは建築家出身の設計家の進出が目立っている」（森 1960 p.129）として、堀口捨己らとともに谷口の名前を挙げている^{注6}）。これらのことより、森が谷口を庭園設計者としても認めていたことがわかる。この時期の森と谷口の具体的な交流は詳しくはわかっていないが、ふたりの東京工業大学での研究は終戦後に関連を持つようになる。

昭和初期の森の研究を指導してきた東京工業大学教授の前田松韻は戦時中の1944（昭和19）年に亡くなった。終戦後には、森は藤岡通夫との交流を通して東京工業大学とのつながりを持ち続ける。1950（昭和25）年には、前田が生前に担当していた東京工業大学の庭園学の講義を、藤岡の依頼により森が非常勤講師として担当するようになる^{注7}）。そして、森は1953（昭和28）年にそれまでの研究成果をまとめて学位請求論文『桂離宮の研究』を提出し、東京工業大学から工学博士の学位を授与される。『桂離宮の研究』の緒言によると、桂離宮の研究において谷口と森が研究協力の関係にあったことがわかる^{注8}）。また、『森蘊氏提出学位請求論文審査報告』をみると、審査員が藤岡と谷口及び科学技術史が専門の東京工業大学教授加茂儀一の3名であ

り、藤岡が主審であったことがわかる。審査員らによる森の論文の評によると、森の研究のうち、従来の桂離宮研究では行われなかった工学的研究手法を高く評価している。森がこの桂離宮の研究において、これらの工学的手法を用いた研究を行ったことは、根本の学理に重きを置くと同時に実地にも重きを置き、実地問題に対して実際的方法をもって討究することを求める東京工業大学の教授方針に合致しているとみることができる。この工学的手法を用いて創設時や増造時の桂離宮を復原し研究する方法、すなわち「復元的研究」は森のその後の研究手法の中心となるものである。

このように、昭和初期から戦後にかけて、東京工業大学において森と谷口の間に研究上の交流があったことがわかる。

3. 谷口吉郎と森蘊の「意匠心」

昭和初期に、谷口吉郎は東京工業大学で教鞭をとると同時に、新校舎を建設する復興部にも勤務し、水力実験室の設計を一任される。その時のことを後年になって谷口は以下のように記している。

その実験室の設計を進めている時、清純な造形にあこがれる意匠心がわきあがってくるのを感じた。そんな「清らかな意匠」は、その後も私の設計に継続する念願となるが、その方向へ私の意匠心が志向するようになったのが、この「水力実験室」の設計であった（谷口 1974 p.66）

水力実験室の竣工は1932（昭和7）年、谷口が27歳の時である。その後、谷口は東京工業大学材料実験室や自邸をはじめとする住宅、あるいは慶應義塾幼稚舎校舎などの設計を通して、「意匠」に対する考えを深めていった。その時に、谷口は自身の清純な造形へのあこがれや、その後の谷口の設計のテーマとなる「清らかな意匠」を志向する思いを「意匠心」という言葉で表している。

ここで、まず「意匠心」の前に「意匠」という言葉に対する谷口の考えを整理しておくこととする。谷口は1938（昭和13）年1月に日本建築学会の機関誌『建築雑誌』に「建築意匠学・序説」という文章を發表した。ここで谷口は、当時の建築学が各方面に進歩する中で、「意匠」の本義が曲解されたままで建築から見棄てられてしまうようなことがあってはならないとし、建築学の各分野についての考察を行いながら、それと関連して「意匠」とはいかなるものであるかを検討している。その結果として谷口は「建築意匠の新しい發足を要望したい。／新しい意匠精神を以て、建築學の諸學科に正しき批判精神を吹き込み、建築家の魂に強い氣力を植ゑ付け、建築家の頭腦に知性を甦へらせるものとしたい」（谷口 1938 p.23）としている。そして、谷口は建築歴史学・建築美学・建築計画学・建築工学の建築学各分野に対する「意匠」の位置付けや必要性を述べた^{注9)}上で、建築学全般に対しての「意匠学」の必要性について以下のよ

うに記している。

建築學全般に對しても、批判學としての要素を加味させ、各分科の學科に相互識意を持たせるにも、建築意匠による統率が必要であろう。ここに意匠學の哲學的意義が生ずる（谷口 1938 p.23）

谷口にとって「意匠」とは単に造形ではなく、建築學全般を批判しつつ、相互に関係付け、統率する役割があると考えている。さらに、谷口は建築學科での教育においても「意匠」の必要性を主張している。

建築學科に對しても、單なる學問の研究と建築物の技術たらしめず、「人間」としての建築家を訓育する教程たらしめることに、氣付かしめるものも意匠でなければならぬ（谷口 1938 p.23）

谷口は、建築學科が單なる研究と技術習得のためにあるのではなく、建築家を訓育するためには「意匠」が必要であるとしている。

その後、「建築意匠學・序説」を発表した1938（昭和13）年10月、谷口は學生時代の師である伊東忠太のすすめにより、外務省の囑託としてベルリンに新築される日本大使館の工事に関与し、そこに日本庭園をつくる仕事によりドイツに出張した。第二次世界大戦が勃発した翌1939（昭和14）年10月に急遽帰国した後、谷口はドイツでの経験をまとめて1947（昭和22）年に『雪あかり日記』として出版した。その中に、谷口の考える「意匠心」についての記述がある。

街にも、公園にも、都市計画にも、それが「造形物」である以上、その設計者の作風が明瞭に感じられる。その場合に、作者は「設計者」という個人である場合もあるし、「市民」という集団の場合もある。あるいは「為政者」という官庁の場合もある。さらに「時代」という時の精神が、その作者となっている場合もある。いずれにしても、造形には必ず作者の意匠心が発揮される（谷口 2015 p.26）

ここでは、「意匠心」を発揮する作者が設計者個人だけではないとしている点が谷口の考えをよくあらわしている。また、『雪あかり日記』の中に谷口がベルリンで建築家シンケルの設計した古典主義建築の体験を通して考察した伝統や古典に対する考えが述べられている。谷口は「合目的性」と「伝統性」という両面からシンケルの建築を評価している。シンケルの建築を通して、「合目的性」は谷口の建築理念の重要な位置を占めるようになる。それと同時に、谷口はシンケルの「無名戦士の廟」設計時点での思考の過程について、「この工学的な建築美にめざめた新しい精神も、彼の全意匠心から見れば、一つの側面を示すものにすぎなかった」（谷口 2015 p.174）として、シンケルの意匠心の技術的な革新性ととも精神的な伝統性にも注目し

ている。

「記念碑性」と「環境適応性」の主張によって、彼の建築精神は「合目的主義の革新性」から、「古典主義の伝統性」に道を開くに至ったのだと、私は考えてみた[…中略…]工学的な正しさを主張し、それを基本条件としたものであったがため、それが古典主義と結びつく場合にも、ただ形式的でなく、堅実な正確性を欲するものとなったのであろう[…中略…]彼の建築には、他の古典主義建築家の作品とちがった一種の品格がそなわり、形式性の奥に、なにか崇高なものに憧れようとする意匠心が清く澄むに至った大きな理由が、そんな制作態度にあるのである(谷口 2015 pp.175-176)

谷口はドイツでシンケルの古典主義建築を経験することにより、新しい合理主義建築のみを一面的な見方で評価するのではなく、「歴史」を貫く建築美の本質を探求し、「合目的性」と「伝統性」という両面から「清らかな意匠」を追求するようになり、それを追求する精神を「意匠心」という言葉で表している。これ以降も、谷口の文章や発言には度々「意匠」あるいは「意匠心」という言葉が出てくるようになり、設計による実践やドイツでの体験を通して、谷口にとって「意匠」が重要な研究テーマになっていたことがわかる。

さらに、雑誌『新建築』1974年1月号に掲載された村松貞次郎との対談「清らかさと意匠心—生きることを建築に求めて」の中で、村松は「日常の小さな生活の小さなものの意匠心がさらに建物になり都市になり、環境全体に発展していく。ある意味で意匠心ということがこれほど必要な時代ははまだかってないと思います」(谷口他 1974 p.284)としている。そして、谷口はそれに対して意匠心について以下のように返している。

意匠心といいますが、それは実は名もない人がよくやっているのですよ、だれが
つくったか知らん、万葉以来の読み人知らずのああいう歌の感動…

(谷口他 1974 p.284)

対談では村松は重ねて谷口に質問している。村松の問いは、名もなき歌人が歌をつくり、名もなき大工が民家をつくるときに、その歌人や大工のところに意匠心を設定するのか、それに対して建築家がこうしなければというところが意匠心なのか、そういう読み人知らずの持っている純粹なところに意匠心を発見しなければならないのか、という問いであった。それに対して谷口は以下のように答えている。

意匠心というのはポエジーとまた違いまして、ひとつの造形化されたポエジーなのですよ、つまり造形のときにポエジーをもつということ[…中略…]良寛さん

の書を読み歌を鑑賞したときに、やはり建築家と同じくコンポジションがある、そういうものが意匠心であって、読み人知らずであってなくてもコンポーズするというこの中には純粹さがある […中略…] そういう無心さを目的意識性によってつかもうとするときにその純粹さが私に響いてくるということでしょう、そういうものの中に清らかさを発見するということでしょうね

(谷口他 1974 p.284)

谷口は、「造形のときにポエジーをもつ」ことこそ意匠心であるとしている。谷口の言う意匠心とは、建築家やデザイナーなどの造形を職業としている人だけでなく、それ以外の人たちも含めて、意識している意識していないに関わらず、常に彼のいう「意匠」の精神や思いを持っていることを指している。そして谷口は、そのなかでも建築家は常にこの意匠心を持つことが必要だとしている。

建築が心のよりどころといいますか […中略…] 夕方になると子供が家へ帰りたいたいという気持ち、ああいうものが団地の建物の中にもなければならぬ、そして建築家はそこに、できなくても思いを持っていることがひとつの意匠心だと思うのです (谷口他 1974 pp.284-285)

一方、森は谷口が審査員を務めた学位請求論文『桂離宮の研究』(1953)の緒言で、桂離宮の研究において取り上げたい大きな問題を「意匠心」という言葉を用いて説明している。

ここで取り上げたい大きな問題は、桂離宮の性格を把握することであり、その位置、方位、構造等を導来するに至った社会的背景と生活環境及び作者達の意匠心をかり立て、この傑作を生ぜしめたその動機と工事の経緯等を究明するにあるのである (森 1953 p.4)

森の地形測量を含めた工学的手法を用いて創設当時や増造時の桂離宮を明らかにする「復原的研究」によって、作者達の意匠心をかり立てた動機の究明をするという点には、研究協力の関係にあり、学位請求論文の審査員であった谷口の影響があると考えられる。森が学位請求論文『桂離宮の研究』において谷口から常に協力助言されたとしたのには、このような森と谷口の交流が背景にあったことがわかる。

ここでは、谷口の記した文章や対談での発言などから、谷口のよく使う言葉として「意匠」および「意匠心」について整理した。谷口は、建築学における「意匠」については単に造形ではなく、建築学全般を批判しつつ、相互に関係付け、統率する役割があると考えていた。また、建築学科における「意匠」の役割について、建築学科を単なる学問の研究と建築物の技術の教

育のみではなく、人間としての建築家を訓育する教程とするためにも「意匠」が必要であるとされていた。また、谷口は「意匠心」という言葉について、「意匠心」を発揮する作者が設計者個人だけではなく、「市民」という集団、「為政者」という官庁、「時代」という時の精神などもその作者となっている場合があるとしながら、「造形のときにポエジーをもつ」ことこそ「意匠心」であるとし、常に彼のいう「意匠」の精神や思いを持っていることが重要であるとしている。そして森は、研究協力の関係にあり森の学位請求論文の審査員であった谷口の影響を受けて、日本の伝統的な建築と庭園の研究における作者達の「意匠心」の探求を重要なテーマに位置付けていた。

4. 修学院離宮意匠論

修学院離宮の建築と庭園について、森蘊は「場所により、地形に應じて、自由自在の計畫を樹立することの出来たことは、後水尾上皇の意匠心の非凡を物語るに足るであろう」(森 1955b p.99) とし、谷口は「当時の公家が伝統の洗練美を追求しようとする強い意匠心に基づくものであった」(谷口・森他 1975 p.14) としている。ここでは、森と谷口の修学院離宮意匠論を通して、それぞれの修学院離宮の建築と庭園のとらえ方、さらにそれぞれの「意匠心」がどのようなものであるかを考察することとする。

4-1. 森蘊の修学院離宮意匠論

森には修学院離宮に関する文章として、『桂離宮と修学院』(1951)、『修学院離宮の復元的研究』(1954)、「修学院離宮造営に利用された建物と地形について —修学院離宮の研究(補遺)—」(1955)、『修学院離宮』(1955)、『写真集 修学院離宮』(1970)、『日本の美術 第112号 修学院離宮』(1975)、『御所離宮の庭3 修学院離宮』(1975) などがあるが、ここでは特に修学院

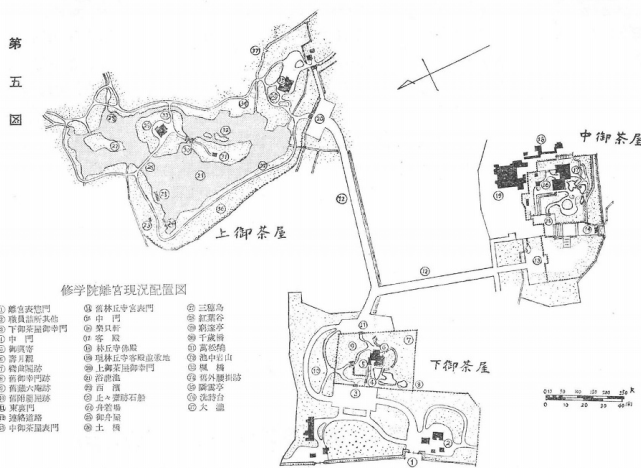


図3 修学院離宮
(森 1954 p.42)

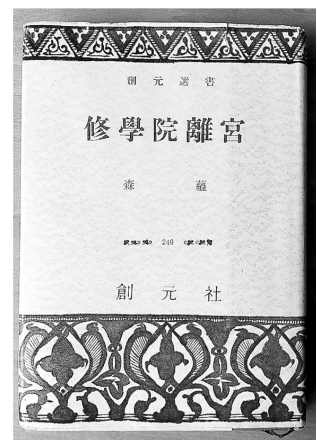


図4 修学院離宮 森蘊
1955 (昭和30) 年
(筆者撮影)

離宮の意匠について詳しい考察のある1955（昭和30）年に創元社から発行された『修学院離宮』を中心にみていくこととする（図3、4）。

『桂離宮の研究』と同様に、森は『修学院離宮』においても古文書や指図などの資料調査と現地での精密な測量などを通して、創始された時の姿を復原することにより、修学院離宮の作者達の「意匠心」をかり立てた動機を究明しようとしている。

経営者の構想や、指導者の作意や、作品の意匠を論議する上から言つても、創始の姿について考えねば全然意味がないと思われる〔…中略…〕學問的に固い言葉で言えば、復原的に示したいと思う（森 1955b p.117）

森はまず、修学院離宮を創始した当時の後水尾上皇が置かれていた社会的状況を考察している。当時、後水尾上皇は徳川幕府との関係により、天皇位を譲位し、上皇として政治的・経済的に制限された立場に置かれていた。

一見歡樂雅遊の境地と見えるこの離宮の亭榭も一木一石も、すべてが政治的失意の上皇のやる方なき悲憤の遣り場であり、別な見方からすれば、そうした世俗の葛藤を超越した信仰生活の道場であつたとも謂えると思う（森 1955b p.94）

谷口は、「時代」という時の精神も「意匠心」を発揮する作者になるとしている。そうであるとする、後水尾上皇が置かれたこの社会的な状況も「意匠心」を発揮し、また後水尾上皇の「意匠心」をかり立てる動機となるであろう。

隣雲亭壽月観などの庭園建築は、在来のものか、又は移建したものをうい、瀧や池の如き庭園景觀については、極度に在来の地形地物を利用した巧妙な敷設によるものと思われる（森 1955b p.77）

更に注目すべきは、その設計指導に際し、工事の進捗状況を考慮に入れ、重量の大きい岩石や樹木の移動に無駄な労力と経費をかけることをさけるために工夫を行ったことである（森 1955b p.98）

周囲には豊富な水を存分に利用して、池や細流や瀧などを作り、各處に樹石を配置したその細部の意匠について見ても、實に庭園藝術的によく纏まつた仕上げが行われているといつてよからう（森 1955b p.120）

森は、後水尾上皇が自身の置かれた社会的状況の中でさまざまな工夫を行なっている点に着

目している。森は修学院離宮の復原的研究から、上皇は経済的な制約の中で、地形地物や建築から、岩石や樹木、さらに水まで、その場所に以前からあったものを最大限に活かしながら、そのなかで自身の理想的な世界をつくり出すことを目指したとしており、それにより上皇が上御茶屋・中御茶屋・下御茶屋と分散しながらも一体となった、他に類例のない形式の庭園をつくり上げたとしている。

しかしながら上皇は、当時の大名諸侯なら當然行つたであろうように、敢てこの三つの御茶屋を一つの更に大きな區劃の中に取り込んで、区域内を獨占するということは考えなかつた。離宮の景觀又は生活上必要な最小限の區域に止め、他は従来通り人民の手によつて自由に耕作や造林をつづけさせることを容認したのである（森 1955b p.150）

最も切りつめられた経済的制約の中で、最も効果的に造營を行おうとする場合の工夫に外ならない〔…中略…〕従つて自然を支配するなどという大それた意圖など微塵もなく、離宮の計畫はひたすら、自然にとけ込もうとする實に謙虚な態度であつた〔…中略…〕その結果、かえつて大自然を思いのまま操縦し得た最も利巧な方法でもあつたし、それにも拘らず必ず成功するという設計者の自信の程もほの見えるように思われる（森 1955b pp.150-151）

私は他とは全く異つたそのような纏め方、日本山莊史上前例のない配置計畫、それ自體に、かえつて異常の興味を感ずるのであり、この點を直視せねばならないと考えるのである（森 1955b p.119）

森は、修学院離宮の特徴のひとつである分散した三つの御茶屋は、こうした上皇の経済的な制約の中でつくり上げられたとしているが、それを単なる前提条件とするだけではなく、その制約こそがこの離宮を自然に溶け込んだ謙虚なものにしたとしている。さらに、そのことがかえつて自然を思いのままに操ることになつたとし、それは単なる偶然ではなく、上皇はじめ造園に関わつた人たちが自信を持ち、確信を持って設計を行なつたと考えている。このように、その時に与えられた厳しい状況や条件の中でも、その建築や庭園をより良い、より美しいものにしようとする意志の中に森は「意匠心」をみていると考えられる。

ところで、森は修学院離宮の作庭における上皇たちの「意匠心」はその時だけの思いつきや偶然などではなく、上皇たちのそれまでの経験によりつくり上げられたとしている。上皇は修学院離宮の敷地を決定する前に、北山鹿苑寺付近に内々に山莊敷地の適地を物色していたのを手はじめに、高野川上流の長谷、岩倉、幡枝などに御幸御殿あるいは御幸のための御茶屋を設け、四季折々に雅遊を楽しんでいたが、それらはいずれも自然のままの田畑にまたがり、林地にとりまかれて分散してつくられていた。

この三箇所は修學院が理想的な敷地と決定して、ここに離宮が完成する以前に於ける準備行動であり、それは理想境の試作であつたことを示すものであろう

(森 1955b p.119)

豊富な経験済みの意匠と手法とを活用し乍ら、修學院の恵まれた地形地物の選定に成功しつつ、自ら陣頭に立つてその大工事を指導された事を考えると、修學院離宮に於ける理想境の實現に向つて注がれた上皇の情熱の、並々ならぬものがあつたことを思わせるのである (森 1955b p.99)

森は、後水尾上皇により長谷、岩倉、幡枝などにつくられた御幸御殿あるいは御幸のための御茶屋は、修学院離宮の建築と庭園をつくりあげるための準備行動であり、理想郷を目指すための試作であつたと考えている。つまり、森は修学院離宮にみられる上皇の意匠心は、それまでの経験の積み重ねの上に成り立っており、理想郷實現のための情熱とその継続により生み出されたと考えている。

さらに、森は修学院離宮の建築と庭園には、後水尾上皇の意匠心だけではなく、徳川家康の内孫で、後水尾上皇の中宮である東福門院、つまり徳川和子の意匠心も大きな影響を及ぼしていると考えている。

修學院離宮の建築意匠を考えて行く上には、どうしても後水尾上皇の意匠心を考える場合と同様、先ず東福門院の御性格や趣味などを考えて見るのが大切ではないかと思う (森 1955b p.106)

森は中御茶屋客殿について、その前身建物であり、それ以前に焼失した女院御所内奥御対面所における「東福門院の意匠心を讀み取ること」(森 1955b p.115)により、中御茶屋客殿として移築された奥御対面所の意匠について「その自由な創造精神と、巧緻な意匠心などは、よく伝えられていると思う」(森 1955b p.116)とし、修学院離宮の建築について東福門院の意匠心が反映されているとしている。また、女院御所の庭園を拝見した鳳林承章の記事を引用して、「その派手な意匠にはさすがに目の肥えた鳳林承章も驚目しているのであつて、この記事は東福門院の意匠心の一斑を物語つているようである」(森 1955b p.116)とし、修学院離宮の庭園についても東福門院の意匠心の影響を考察している。

次に、それぞれの御茶屋の意匠について、森がどのようなところに作者の意匠心をみているかを確認する。森は、修学院離宮の三つの御茶屋が分散しながらも統一している点を高く評価しているが、それとともにそれぞれの御茶屋が異なった意匠を持っていることにも着目してい

る。

このようなばらばらの区域を持つことは、日本建築史上、庭園史上類を見ないのであると言つてよいであろう。同時に上、中、下の御茶屋と呼ばれる個々の庭園を見ると、これ又その意匠がまちまちである。上御茶屋は大池を中心として周囲に小茶亭を配置したもので、庭園が主要部分をなしているのに対し、中御茶屋と下御茶屋とでは、建物の方が主で、庭園は僅かに小面積の傾斜地に細流又は小池を持つだけである。それは建築に対して頗る従屬的に取扱われているという感じが深い（森 1955b p.118）

森は、上御茶屋が庭園を主とした意匠であるのに対して、中御茶屋と下御茶屋は建築を主とした意匠でまとめられているとしている。まず、森は下御茶屋について、寿月観の建築を中心として、それと調和するように庭園が計画されているとしている（図5）。

細流が彎曲して斜面を奔り下る所、水邊には幾つかの石組みがあるが、傾斜面や平地の石の数は極めて少ない。それは瀟洒たる寿月観との融合を考えての結果であろう。[…中略…] 寿月観前面に至れば、大體昔のままで、建築と環境とは寔に心にくい程の調和を今猶見せている（森 1955b p.125）

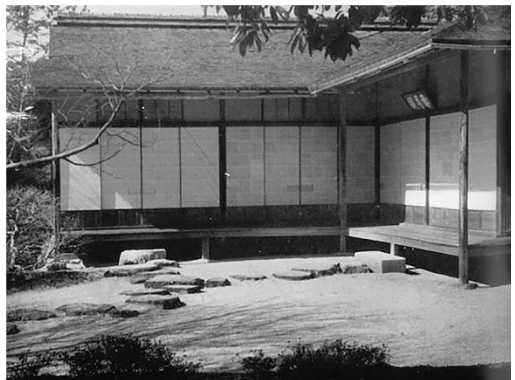


図5 寿月観前庭より一の間・二の間を望む
（森 1955b 口絵7）

前稿（田中 2017）でもみたように、森は生涯を通して建築と庭園の結びつきを求めて日本庭園史研究と作庭を行なった。修学院離宮の研究においても、建築と庭園の結びつきの視点を持って考察を行なっている。下御茶屋の庭園については、寿月館の瀟洒な意匠と調和するように庭石の数を少なくし、控えめな表現となっている点を森は評価している。これは、ほぼ同じ時期につくられた桂離宮の「建築や庭園の意匠が、實用に立脚したものであり、機能と美観との兩立については、並々ならぬ工夫が凝らされている」（森 1955b p.153）点や、御殿から庭園への移り変わりや松琴亭の前面の建築的な扱いの庭園に作者の強い造形意識がはっきりと表れた庭園と非常に対比的である。

しかも桂離宮の或部分に見出されるような意識過度な點はどこにもない。それはむしろ虚脱というか倦怠に近いとさえ思われるほどのテムボののろさを感じさせるものである。その點俗塵を遠くいと、憂世の苦惱から離脱しようとする御山

荘の計畫としては、寔に當を得た意匠であると評することが出来るであろう

(森 1955b pp.125-126)

ここでは、意識過剰な点がみられる桂離宮の建築と庭園に対して、修学院離宮ではむしろ意識過剰なところのみられない点に作者の意匠心が表れているとしている。これには、後水尾上皇の社会的状況や経済的制約によって、その場所に以前からあったものを最大限に活かすことにより、この離宮が自然に溶け込んだ謙虚なものになっていることとも関係していると考えられる。

上御茶屋については、森は雄大さを高く評価している。その雄大さは、修学院の地に以前よりあった地形と水の流れを最大限に活かしてつくり出されている(図6)。

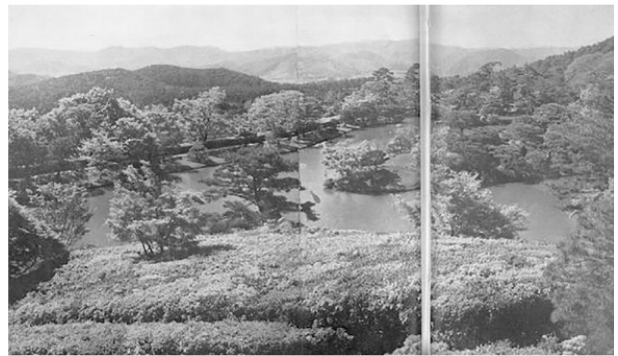


図6 隣雲亭から浴瀧池、西濱を超えて岩倉、
鞍馬方面の新緑の山々を望む
(森 1955b 口絵46)

上御茶屋についても復原して観察したのであるが、ここで上御茶屋の庭園意匠を概観して見るならば、前述のように数多くの溪流を一つの塘堤によつて堰き止め、その上更に音羽川の上流から横流しに水を引いて来て満々たる大池を湛えるのに成功したのである(森 1955b p.129)

上御茶屋庭園というのは、偉大な自然風景の極めて一部を、離宮の使用目的に従つて区劃したもので、人工造園による部分はその約二割にしか當らないのではないかと思う(森 1955b p.131)

ここでは、後水尾上皇は単に庭園の造形を作り出すのではなく、堰堤を築いて多くの溪流を堰き止め、音羽川の水を引いてくることにより、大きな池をつくり出している。それは造園工事というよりも大規模な土木工事である。

最初の計畫者は池を人工によつて穿鑿するのではなしに、或る自然現象即ち、噴火、隆起又は陥没などによつて堰き止められたような池の姿とした。従つてその水面に浮ぶ島は盛土をして造つた感じでなく、山稜の一部が僅かに水面に残つたという感じに取扱われねばならないのをよく知つていた(森 1955b p.132)

森は、この堰堤を築くことによりつくられた庭園は、噴火や隆起、陥没などの自然現象により堰き止められた池の姿であるとしている。日本庭園が自然の姿を再現することをその意匠の特徴としていることから考えると、上御茶屋において後水尾上皇がつくり上げた庭園は、その雄大な表現であったと考えられる。ここで森は、自然の地形と溪流の流れなどの状況を正確に把握・分析し、そこに自分が理想とする庭園を構想し、他にみられないような庭園として実現していく発想そのものに後水尾上皇の意匠心をみている。さらに、森は上御茶屋のどこからでも雄大な自然の借景や、京都の市街や田園の眺望が得られる点も高く評価している。

何れの箇所からも雄大な遠山や丘陵を背景又は借景として取込み、且雄大な京洛の市街や田園の眺望を擅にすることができる点で、それまでの日本庭園には見られないような特色をもっているのである（森 1955b p.130）

上御茶屋の庭園自身素晴らしいが、更にその周囲の自然風景の故に一層生き生きとして見える。[…中略…] 修学院離宮に於ける庭園意匠では、一見最も自然風景に近くはあるが、それでいて極端な自然主義ではない。そこには或る限度に於て明らかに、人工と自然との対立がほのかに示されており、それはイギリス風景式庭園の特色である寫生主義であるよりは、やはりより多く日本式象徴に傾いていることがわかるであろう（森 1955b p.131）

ここでは、森は修学院離宮の建築と庭園について、後水尾上皇が置かれた社会的な状況や経済的な制約のなかで、それまでの経験の積み重ねや、理想郷実現のための情熱を継続しながら、その敷地や周囲の自然や地形地物、建築から、岩石や樹木、さらに水まで、その場所に以前からあったものを最大限に活かすことにより、この離宮を自然に溶け込んだ謙虚なものにし、そのことがかえって自然を思いのままに操り、他にはみられないものになっている点を高く評価していることがわかった。森はそこに後水尾上皇や東福門院など、修学院離宮の建築と庭園の創始に関わった人たちの意匠心をみている。

なお、森の『修学院離宮』の緒言に修学院離宮研究の経緯が説明されている。

長年に互り、宮内廳書陵部、東山御文庫、史料編纂所、陽明文庫をはじめ各處で桂離宮に関する史料を涉獵している中に、桂離宮の諸事情が次第に判明していつたのさえ、僥倖と思えてならなかったのに、それに併行して全く思いもかけない程短い期間中に、次から次へと修学院離宮關係の史料があつまつて來た

（森 1955 緒言）

森の修学院離宮研究は桂離宮研究と併行して進んでいたことがわかる。そして、1950（昭和

25) 年度には、桂離宮の研究において谷口と森が研究協力の関係にあり、さらに谷口は桂離宮研究をまとめた森の学位請求論文の審査員であったことにより、谷口は森の桂離宮研究とともに修学院離宮研究についても研究方法やその成果についてよく知り得たであろうと考えられる。そこで、次に谷口吉郎の修学院離宮意匠論をみていくこととする。

4-2. 谷口吉郎の修学院離宮意匠論

谷口吉郎は、森蘊と研究協力の関係となり学位請求論文の審査員となった1950年代以降に庭園に関する文章を多く発表するようになり、1956（昭和31）年に毎日新聞社より『修学院離宮』を出版した（図7）。ここでは、この谷口の著書『修学院離宮』をもとに谷口の考える建築と庭園における意匠心について考察する。ただし、谷口は1962（昭和37）年に淡交新社より『修学院離宮』の普及版を出版しており（図8）、そこで文章につ

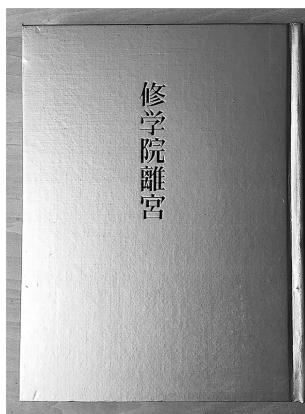


図7 修学院離宮 谷口吉郎
毎日新聞社
1956（昭和31）年
（筆者撮影）

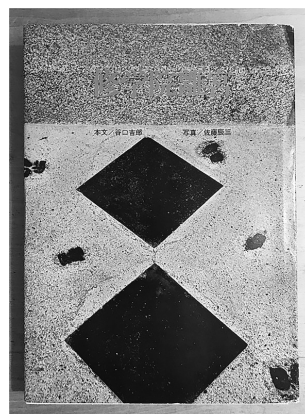


図8 修学院離宮 谷口吉郎
淡交新社
1962（昭和37）年
（筆者撮影）

いて細かい修正を行っているため、文章については淡交新社版『修学院離宮』によることとし、写真などは毎日新聞社版『修学院離宮』によることとする。

谷口の『修学院離宮』は「音」がテーマになっている。文章全体が楽章として展開し、庭を踏む足音や遣り水の流れや滝の音など、傾斜地に三箇所に分かれた修学院離宮の地理的特徴や空間構成、造形の意匠の特徴をさまざまな音を聞き分けることで表現している。ここには、環境の一要素である音に注目している点に谷口らしい視点が設定されている。そして、谷口は『修学院離宮』のはしがきに以下のように記している。

「修学院離宮」を純粋の歴史的立場から論じ、その創設や変遷を明らかにすることは、もとより大切であるが、その方面にはそれぞれすぐれた研究書がある。ことに森蘊博士の研究は、古図や古い記録によって造営の規模を復原されたものであるが、私はそれから多くの知識を得たことを深く感謝する。しかし、私自身は建築の設計に関係し、その造形の意匠に関心を持つものである。この書はそんな観点にたった観察と感想のメモである（谷口他 1962 p.4）

ここで谷口は森の研究から多くの知識を得たとしている。さらに、谷口は挿絵に使う修学院

離宮の実測図を奈良国立文化財研究所から借りたとしており、これは1962（昭和37）年に淡交新社から『修学院離宮』の普及版が出版された時に森から借りたと変更している。谷口の毎日新聞社版『修学院離宮』が発行された2年前の1954（昭和29）年に森は『修学院離宮の復元的研究』を発表し、1955（昭和30）年に創元社から『修学院離宮』を出版している。谷口は森の研究から多くの知識を得ながら、建築家としての観点に立って観察し、修学院離宮の造形の意匠を表現しようとしたのである。

まず谷口が建築家としてこの庭園をみたときのテーマとしている音については、「『修学院離宮』を音楽にたとえるなら、このような『庭の足音』こそ、その作庭の第一主題だといいたい。それほど、いつもこの庭の鑑賞には、足音が余韻をひいて、耳の奥に残るのを感じず」（谷口他 1962 p.12）とし、また「『修学院』の山荘には、いつも水音が、さらさらと鳴っている」（谷口他 1962 p.12）とした上で、以下のように記している。

あるいは近く、あるいは遠く、それが庭の空間に奥ゆきを感じさせる。しかも、その水音は、決して騒々しいものではなく、庭を清めて、人の心を庭と親密にしてくれる […]中略 […]「修学院」の庭ではこの人工の水音が、作庭の重要な主題となり、その演出が庭の設計に考慮されているのである（谷口他 1962 p.13）

谷口は、戦前の東京工業大学では建築意匠とともに、衛生工学（現在の建築環境工学）についても授業を担当していた。また、1935（昭和10）年に竣工した自邸の設計では断熱と通風、採光と日射調整などについての十分な検討を行なっている。さらに、1942（昭和17）年に「建築物の風圧に関する研究」により日本建築学会賞学術賞を受賞し、翌1943（昭和18）年に同研究により東京工業大学から工学博士の学位を授与された谷口にとって、「意匠」とともに「環境」は研究および設計の上での重要なテーマであった。そのために、谷口は修学院離宮でもまず足音や水音などの「音」という環境面に設計者の意匠心をみているのである。

足音が「修学院山荘」の作庭にこもる第一主題であるなら、この庭の要所々々に、流水の音を響かせている水音は、その第二主題であるといつてよかろう。第一主題の「足音」によってよみがえる自己は、第二主題の「水音」によって自我の静かな周辺を認識する。「足音」は身をすこやかにし、「水音」は心を洗ってくれる（谷口他 1962 p.15）

ここで、足音については、霰こぼしの御幸道をはじめ、延段や飛び石などの石の上を歩くことの多い桂離宮に対して、砂利や土の上を歩くことの多い修学院離宮の園路の特徴によるものであるが、そこには森が意識過剰な点がみられる桂離宮の建築と庭園に対して、修学院離宮ではむしろ意識過剰なところのみられないと指摘していることと関係している。さらに、水音に

については修学院離宮が傾斜地にあり、その地形と周辺の水の流れを利用してつくられていることと関係している。谷口は『修学院』の地形は傾斜地である。この立地条件がこの庭の最も著しい特異点で、そのために庭の構想は勾配を持ち、あらゆるながめに角度と流動が目だつ」(谷口 1962 pp.82-83)としている。そしてここでも、それらの背景には、後水尾上皇の社会的状況や経済的制約によって、その場所に以前からあったものを最大限に活かすことにより、この離宮が自然に溶け込んだ謙虚なものになっていることがあるといえる。

また、谷口は「離宮はこのような環境の中にあるがため、周囲のながめは広い。雄大な景観を庭内に収めた『見晴らし』こそ、『修学院離宮』の大きな特色といわねばならぬ」(谷口他 1962 p.17)とし、修学院離宮の周辺環境と三箇所に分散した配置について言及している。

敷地の外は田畑や山林に囲まれ、三つの茶屋はそれぞれ孤立したものとなっているが、それが連絡路によって、一つの大きな庭園としてまとめられている。しかも、全体として統一され、変化に富む。この点においても「修学院離宮」の庭は、日本庭園としても、たぐいまれなものといわねばならぬ (谷口他 1962 p.18)

ここで、三つの茶屋が分散していながら一体の大きな庭園となっており、それでいてそれぞれの御茶屋が異なった意匠を持っていることを評価している点は森と同様である。また、修学院離宮の意匠について東福門院の意匠心の影響を考察していることにも森の研究の影響をみることができる。

このような地域的要素と歴史的要素のほかに、さらにもう一つ、この離宮の意匠に見のがしてならないのは、その造形にこもる人間的な要素である。それは創設者の後水尾上皇の人柄や教養、および工事に参加した人々の努力によるものであるが、それと同時にこの離宮に生活した高貴な女性の性格が、この離宮の造形的特性に深い関係を持っていたことをわすれてはならぬ (谷口他 1962 p.19)

ことに「修学院」においては東福門院は、造営計画に当たって、かなり重要な地位にいられた。上皇とともに修学院の地へしばしば行幸されたほどであったから、その女性の美的感覚が、離宮の造形意匠にかなり強い影響を与えたことは事実とみななければならぬ (谷口 1962 p.87)

次に、それぞれの御茶屋の意匠について、谷口がどのようなところに作者の意匠心をみているかを考察する。下の茶屋については、谷口は森と同じく建築と庭園の結びつきについて考察している (図9、10)。

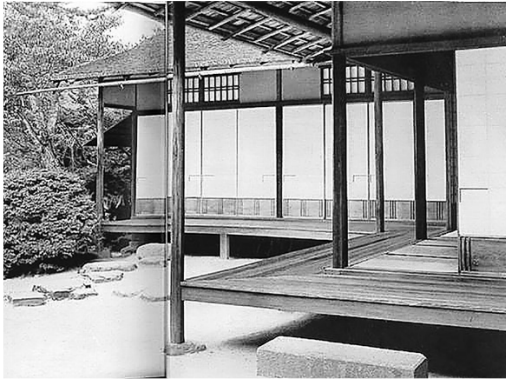


図9 寿月館の縁側と前庭
(谷口他 1956 口絵15)

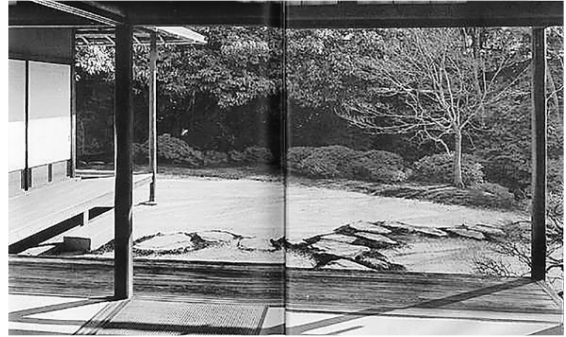


図10 寿月館「三の間」より前庭を望む
(谷口他 1956 口絵17)

さらに庭の奥へ進んでふりかえると、縁側の出隅と入隅が二段に重なり合っ
て、建物と庭との結合が、いっそうこまやかに見えて、美しい構図を作りだす
(谷口他 1962 p.26)

左手の縁から内部にはいると、「二の間」(十二畳)、「三の間」(六畳)がある。障
子を開いて、畳の上から前庭をながめると、額縁の中にはまった絵のように見え
る。[…中略…] このあたりこそ「修学院離宮」のすぐれたながめの一つであり、
「下の茶屋」が「修学院離宮」と称する造形交響楽の第一楽章なら、この「寿月館」
の前庭は美しいメロディーの展開部であろう (谷口他 1962 p.27)

ここでは、特に谷口の建築家としての視点から寿月館とその前庭のあいだの建築と庭園の結
びつきについて考察している。また、毎日新聞社版『修学院離宮』(1956)に掲載されている写
真は、建築家として寿月館とその前庭の造形の意匠を写し取ろうとしたものであり、森の『修
学院離宮』(1955)にはみられないアングルである。

中の茶屋では、楽只軒の室内について「こ
の古い二つの部屋に歴史的な価値の重要さ
を知るが、この室内には寺院というよりも、も
っと家庭的な親しみがこもっているのを感じ
る」(谷口他 1962 p.36)とし、客殿について
「『下の茶屋』が数寄屋風であったのにたいし
て、この『中の茶屋』はもっと宮廷的で、し
かも女性的な艶麗さが濃い」(谷口他 1962 p.
27)として、ここに東福門院の影響がよく出
ているとした上で、特に客殿の上り口まわり

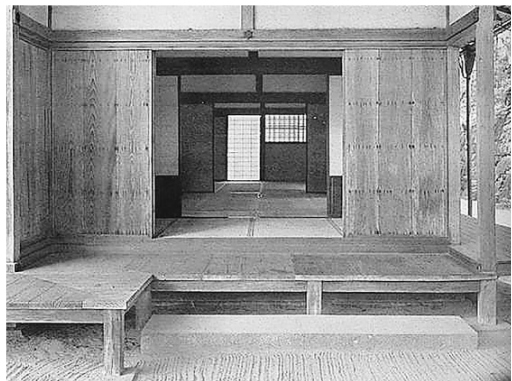


図11 客殿の「上り口」
(谷口他 1956 口絵51)

の意匠について高く評価している（図11）。

正面の右端には、板縁が入隅となって、そこに、矩形の「くつぬぎ石」が低く置かれている。つまり、そこがこの客殿の入口となっているのであるが、建築的な取り扱い方はそれだけであるのに、入口としての構えをはっきりと構成している。その簡明な意匠は、機能的にも造形的にもみごとである。直角ばかりの組み合わせを、すっきりとした非対称にまとめた手ぎわは、あざやかともいわねばならぬ
(谷口他 1962 p.37)

ここでも谷口は建築家の視点から、建築と庭園の結びつきについて機能的・造形的な面から考察を行っている。客殿の入口は、必要な機能を満たしながら、最低限の建築的要素で美しい造形をつくり上げている。その簡明な意匠に、谷口は作者の意匠心をみている。この視点も、森の『修学院離宮』にはなかったものである。

上の茶屋では、谷口はまず御幸門脇の用水溜りに着目し、その何気ない簡素な造形の中に美を見出している（図12）。

ありふれた切り石を組んで、その溝に水をよどませる仕掛けのもので、簡単な沈砂槽である。したがって、なんの巧みもないものだが、その石と水の簡潔なコンポジションが、門前にたたずむ者の目を引く。それは機能と素材から発生した簡素な造形だが、こんな路傍のさりげない造形にもかかわらず、ここでは美が感ぜられる

(谷口 1962 p.42)



図12 上の茶屋・御幸門脇の用水溜り
(谷口他 1956 口絵72)

ここには、谷口の意匠心の考え方がよく表れている。先にみたように、谷口は雑誌『新建築』1974年1月号に掲載された村松貞次郎との対談の中で、良寛の書や歌に建築家と同じくコンポジションがあるとし、そういうものが意匠心であるとしていた。そして、コンポーズすることの中には純粹さがあるとしていることから、谷口はこの用水溜りの石と水の簡潔なコンポジションのなかに無心の純粹な意匠心をみているのである。

さらに谷口は、上の茶屋の隣雲亭について、建築と庭園の結びつきの視点から考察している（図13）。



図13 隣雲亭の土庇
(谷口他 1956 口絵74)

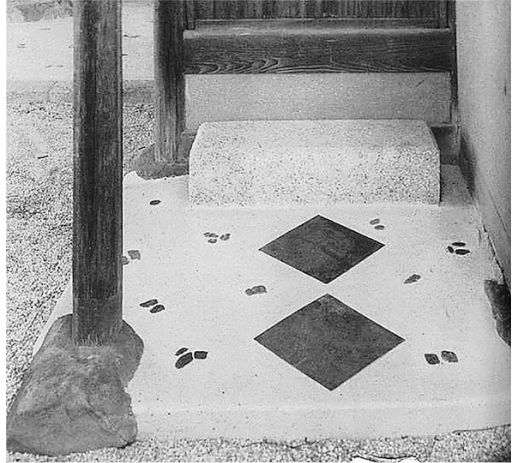


図14 隣雲亭・「くつ脱ぎ石」と「敷き瓦」
(谷口他 1956 口絵78)

建物の周囲には庇が深く出て、その軒下に縁が回る。それが出隅入隅と二段に屈曲し、そのために建物の姿が見る角度によって趣を変化し遠近感を増す。このような視覚効果は日本の数奇屋建築に特有なものである（谷口 1962 p.43）

谷口は、『隣雲亭』の土庇には、変化に富んだ構成が仕込まれているが、それがいや味の無い、すっきりとしたものに感じられるのは意匠感覚の洗練によるものといえよう」（谷口 1962 p.43）とし、特に回り縁の隅にあるくつぬぎの構成に感嘆している（図14）。ここで谷口は、隣雲亭の土庇まわり、特にくつぬぎまわりの白い漆喰の面に真四角のくつぬぎ石と、その前に45度の角度で配置している真っ黒の敷き瓦2枚、およびその周辺の「一二三石（ひふみいし）」と呼ばれる小石などの配置の構成つまり「コンポジション」に後水尾上皇の意匠心をみている。これも谷口の建築家としての視点であり、森の『修学院離宮』にはみられなかった。

また谷口は、隣雲亭の室内からの庭園の眺めについても言及し、ここでも建築と庭園の結びつきについて考察している（図15）。

「一の間」からながめると、正面に山端、松ガ崎、岩倉あたりの景色が遠くに広々と展開する。この雄大な借景こそ、「修学院離宮」の造園の最もみごとな手法といわねばならぬ（谷口 1962 p.44）

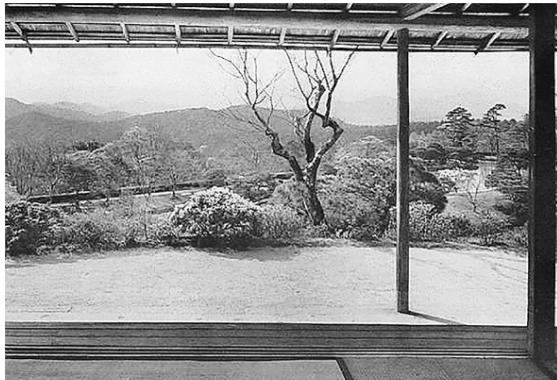


図15 隣雲亭・「一の間」よりの展望
(谷口他 1956 口絵79)

谷口は、「借景が『上の茶屋』において最も顕著な造園効果を発揮している」(谷口 1962 p. 45)とし、隣雲亭とともに窮遂軒の建築についても、室内から庭への展望を通して建築と庭園

の結びつきの考察を行なっている(図16)。谷口は特に入口の位置を含めた窮遂軒の構えの特殊性に着目し、『窮遂軒』のこのような特殊の構えは、全く、池の展望のために設計されたものであることを知る。このことは、入口の位置が池の背面にあることによってもうなずける」(谷口 1956b p.42)としている。また、窮遂軒が庭園の展望のためにつくられているのは、その特殊な構えだけではなく、谷口は室内の意匠についても庭園の展望という目的のために配慮されている点を評価している。

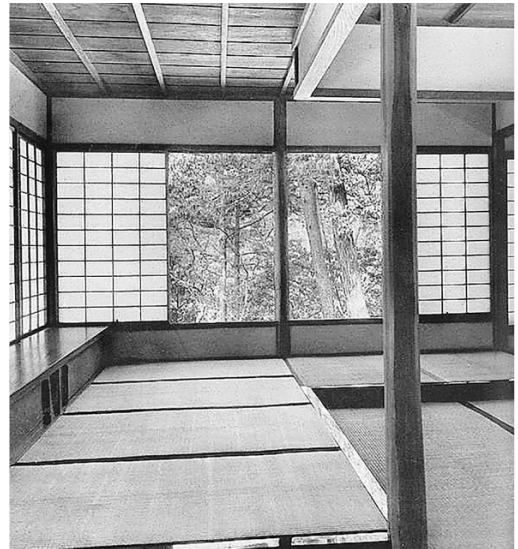


図16 窮遂軒・上段
(谷口他 1956 口絵98)

この建物では、展望が主要目的であるために、そのシテの役割をさまざまげないように、室内は簡潔に仕上げられている。だから建築の室内はワキの役割を心得て、室内には装飾らしいものがない。しかし、室内の構成は、はなはだ巧みである
(谷口 1962 p.48)

つまり、窮遂軒では主目的である展望を妨げないように、装飾をなくし簡潔な室内の意匠とされているのであるが、それでいてその構成が巧みであることを谷口は高く評価している。ここで谷口は、窮遂軒における室内の構成つまりコンポジションに、建築と庭園の結びつき、ひいては修学院離宮全体の意匠に対する後水尾上皇の意匠心をみている。ここにも建築家の視点がみられる。谷口は、この建築と庭園の結びつきの視点から修学院離宮の建築と庭園の全体にわたって高く評価している。

「修学院」の庭は、いつも人を庭内に誘いこむ。庭と人との空間は、たがいに融和している。建物の縁先には、必ず飛び石や敷き石が配置され、園路が地上に

組み込まれている。だから、庭は単に視覚のみの対象でなく、人間の肉体的な散策を目的としている […中略…]「修学院」は感覚の喜びを求めようとする造形であって、冷たい思惟作用を払いのけて、美しい人工の風景へ、人の身体を自由に遊ばせようとする（谷口 1962 p.80）

さらに、谷口は上の茶屋の庭園について「こんな広々とした庭の景色は日本庭園には全くまれで、実にみごとながめである。日本ばなれのした作庭で、西洋の油絵のごとき構図に驚く」（谷口 1962 p.50）とし、堰堤をつくることにより既存の流れを堰き止め、雄大な風景をつくり出した後水尾上皇の手腕を高く評価している（図17）。



図17 隣雲亭より浴竜池を望む
（谷口他 1956 口絵81）

この庭を作った当時には、この築堤の仕事は最新式の大工事であったろう。その設計のために水脈、水圧を考え、さらに池の中心に「中の島」を、ほどよく残し、その残土によってダムを築くことは、相当の技能を要することであった。さらに、池の外側に、目のとどくかぎりの広い「借景」を出現させることは、なみなならぬ腕前だったといわねばならぬ（谷口 1962 p.52）

この堤の上を、小砂利の道が、かすかに弧を描きながら、真一文字に走っている。白いその園路が、緑の木々のあいだを縫いながら、遠く一直線に進む見通しは、他の日本庭園のこせこせした技巧を、勇敢に押しつけているがごとくである。いかにも、のびのびとした築堤技術は、むしろ無技巧と思われるほどだが、日本の庭には珍しい風情を美しく発揮している（谷口 1962 p.52）

谷口は、その堰堤を覆っている大規模な刈り込みについて、「このような大規模の『刈り込み』は、日本の庭園にはまれで、その造形力の雄大さに驚嘆する」（谷口 1962 p.53）とし、さらに「この雄大な、しかも洗練された造形力こそ、この山荘の本領だといわねばならぬ」（谷口 1962 p.93）としている（図18）。ここで谷口は森と同様、自然の地形と溪流の

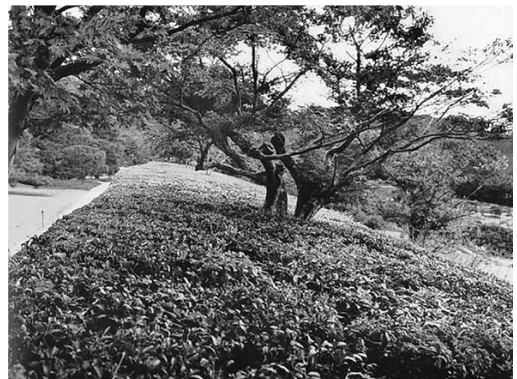


図18 西浜の「大刈り込み」
（谷口他 1956 口絵122）

流れなどの状況を正確に把握・分析し、そこに自分が理想とする庭園を構想し、築堤の高い技術を用いて、他にみられないような雄大な庭園を実現していく発想そのものに後水尾上皇の意匠心をみている。

さらに、谷口は「『修学院離宮』の主人公は後水尾上皇である。したがって、その建築や庭園の美しさに上皇の性格が反映しているのを認めねばならぬ。[…中略…]『修学院離宮』の造営は、上皇の六十歳ごろから、数年にわたる期間であったので、教養の最も円熟した時代であったといえる」（谷口 1962 p.78）とし、「上皇は歌道にひいで、伊勢物語の注釈をみずから著わされた。だから、そのような歌道の美的感情が、この庭の意匠に美しく作用し」（谷口 1962 p. 81）ているとして、修学院離宮の造形には後水尾上皇の意匠心が強く影響しているとし、その造形美の特徴を以下のように記している。

その造形美は宮廷的な洗練によって意匠されている。その宮殿や庭園は、濃厚な装飾を避けて、清浄な淡彩を求めている。だから、文様や彫刻は少なく、色彩も明るい。高く大きい量的誇示を廃して、これは清く深い質的表現を愛していた
(谷口 1962 pp.61-62)

上皇のこの離宮にたいする情熱がはなはだ強いものであったことを思うと、上皇の役割はあたかも現代の劇における演出家のごとく、あるいは映画製作のプロデューサーのごとくであったと考え得る。それゆえに、上皇の教養と性格がこの「修学院離宮」の造形的演出に強く反映していたことを認めなければならぬ
(谷口 1962 pp.78-79)

谷口は、この時代の江戸幕府を中心とする武士の社会の中で、公家が武家に対抗し得るのは伝統的な権威だけであったとし、その権威は伝統的な宮廷の教養によって美しく様式化されていたとしている。そして、そうした修学院離宮の造形には当時の後水尾上皇の政治的・社会的背景が影響を及ぼしている。

「修学院離宮」はそんな政権の対立と騒々しい世相の流動の中に営まれたものである。それゆえに、見方によれば離宮の造営はそんな武家の圧力に背を向け、逃避的な美の陶醉にひたろうとしたかもしれない。しかし、その美的純度は深い。それは日本の伝統的な教養が、激しい時代の潮の中に、美を求め、強く生きぬこうとしたものであったといってもよからう（谷口 1962 p.63）

ここでは、後水尾上皇が当時置かれていた状況である政治的制約や経済的制約などが、かえって修学院離宮の美の純度を深くしているとしている。そして、それは時代の性格であるとしている。

作品がすぐれたものであれば、作者の魂はその形に強く発揮される。さらに、その美が人の胸を打つものであるならば、作者の作意ばかりでなく、時代の性格も、その様式に表現されるはずである（谷口 1962 p.84）

ここで先にみた谷口の意匠心のとらえ方のうち、「『時代』という時の精神が、その作者となっている場合もある。いずれにしても、造形には必ず作者の意匠心が発揮される」（谷口 2015 p.26）という考え方が、修学院離宮の建築と庭園にみられるとしているのであり、ここでは「時代の性格」も意匠心を発揮していると考えられている。そして、谷口は「伝統の血脈」も意匠心を発揮すると考えている。

「修学院」の離宮は、色彩もはなやかで、装飾も美しい。規模も壮大で、展望も明るい。さらに、その建築と庭園の美は世のあわれを多くつつんでいるように見える。天皇の譲位、妃の形見、姫の剃髪、そんな悲運の涙さえ含んでいる。[…中略…] そのときに当たって、武家の圧力に反抗して、公家が守護しようとしたものは、日本の美しい伝統の血脈であった。それを洗練し、当時の時代感覚によっていきいきと、うるわしく生かそうとすることが、この山荘を作ろうとした人々の念願であったろう（谷口 1962 p.91）

ここでは、谷口は修学院離宮の建築と庭園について、まず足音や水音などの「音」という環境面に設計者の意匠心をみていた。これは谷口の独自の視点である。そして、後水尾上皇が置かれた社会的な状況や経済的な制約により、その場所に以前からあったものを最大限に活かし、三つの茶屋が分散しているながら一体の大きな庭園としており、それでいてそれぞれの御茶屋が異なった意匠を持っている点を評価していた。これは森の研究と同様であった。また、修学院離宮の意匠について東福門院の意匠心の影響を考察していることや、上の茶屋の堰堤で既存の流れを堰き止めた雄大な池の展望や周囲の風景への評価などにも森の研究の影響がみられた。さらに、谷口の『修学院離宮』では、特に建築と庭園の結びつきについての考察が多くみられた。縁側と前庭の関係や土庇まわりの構成、室内からの庭園の展望、庭園の展望に配慮した室内の構成など、谷口は建築家としての視点から多くの写真を用いて修学院離宮の建築と庭園の結びつきについて考察しており、そこに修学院離宮の作者達の意匠心をみていた。

5. おわりに

本稿では、お互いに交流のあった森蘊と谷口吉郎の、それぞれの修学院意匠論を考察し比較することにより、森と谷口が修学院離宮の建築と庭園をどう捉えていたのか、さらに日本庭園研究者・作家と建築家との研究上の交流について、「意匠心」をキーワードとしてみてきた。

「意匠」や「意匠心」というのは、谷口がよく使っていた言葉であるが、谷口は建築学にお

ける「意匠」には、単に造形ではなく、建築学全般を批判しつつ、相互に関係付け、統率する役割があると考えていた。さらに、建築学科において建築家を訓育するためには「意匠」が必要であるとしていた。また、谷口は「意匠心」について、それを発揮する作者は設計者個人だけではなく、市民という集団、為政者という官庁、さらに時代という時の精神なども「意匠心」を発揮する作者であるとしていた。さらに、谷口はドイツでシンケルの古典主義建築を経験することにより、「合目的性」と「伝統性」という両面から「清らかな意匠」を追求するようになり、それを追求する精神を「意匠心」という言葉で表している。その上で、谷口はさまざまな造形の構成に、そしてそれを構成する中にある純粹さに「意匠心」があるとしていた。そして、「造形のときにポエジーをもつ」ことこそ「意匠心」であるとし、建築家は常にこの意匠心を持つことが必要だとしていた。

また森は、谷口が森と桂離宮研究において研究協力の関係になり、学位請求論文の審査員となった頃から「意匠心」という言葉を使うようになり、地形測量を含めた工学的手法を用いて創設当時や増造時の建築と庭園を明らかにする「復原的研究」によって、作者達の「意匠心」をかり立てた動機を究明することを自身の研究の重要な目的と考えるようになっていた。

その上で、森と谷口の修学院離宮意匠論において、作者達の意匠心が表われている、あるいは作者達の意匠心をかり立てた動機として、両者に共通していたのは以下の点であった。

- ①後水尾上皇が置かれた社会的な状況や経済的な制約により、自然に溶け込んだ謙虚な意匠となった。
- ②その場所に以前からあったものを最大限に活かす工夫をしている。
- ③三つの茶屋が分散しながら一体となり、それでいて異なった意匠となっている。
- ④修学院離宮の建築と庭園には意識過剰なところがない。
- ⑤修学院離宮の意匠について東福門院の意匠心が影響している。
- ⑥上御茶屋では堰堤で既存の流れを堰き止めた雄大な池の展望や周囲の風景となっている。

これらは、『修学院離宮』のはしがきに書いているように、谷口が森の研究の影響を受けたものであると考えられる。また、両者で異なっていた点、特に谷口の独自の視点は以下に表われていた。

- ①足音や水音などの「音」という環境面に設計者の意匠心をみている。
- ②上御茶屋御幸門脇の用水溜りなどの何気ない簡素な造形の中に美を見出している。
- ③建築と庭園の結びつきの視点から、より細かく修学院離宮の意匠を考察している。

特に、③の建築と庭園の結びつきの視点については、寿月館や楽只軒・客殿の縁側と前庭の関係や、隣雲亭や窮遂軒の土庇まわりの構成、それぞれの庭園建築の室内からの庭園の眺めや展望、窮遂軒の庭園の展望に配慮した室内の構成など、多くの写真を用いて解説している。これらは、谷口が『修学院離宮』のはしがきに書いているように、谷口の建築家としての修学院離宮の造形の意匠に対する関心により考察したものであり、そこに谷口は修学院離宮の作者達

の意匠心をみていることがわかった。

そして、そこには日本庭園研究者・作庭家の森蘊と、建築家の谷口吉郎の間に研究上の交流があったことがわかった。

註

- 注1) 北村耕造は当時宮内省建築課長を務めており、森の近い親戚筋であった。
- 注2) 森は遠縁にあたる有職故実研究家で東京帝室博物館学芸委員の関保之助からも前田松韻に会ってみればと言われていたとしており、森 1973 p.21によると、森がはじめて関に会ったのは1931（昭和6）年の夏と書いている。ただし、森 1971 p.11には1930（昭和5）年とある。
- 注3) 森 1973 p.24による。
- 注4) 森 1971 p.15, 1973 p.34, 1981 p.18などに記述がある。
- 注5) 森 1973 p.25によると、1941（昭和16）年度に文部省から研究補助を受けるのに、前田が森の研究テーマを桂離宮に変更したとある。
- 注6) 森は、堀口・谷口の他に、吉田五十八・坂倉準三・丹下健三・清家清の名前を挙げている。
- 注7) 東京工業大学 1951 p.104による。森 1973 p.25にも記述がある。
- 注8) 森 1953 p.6によると、「昭和25年度に於ては文部省科学研究費の補助を受け、東京工業大学教授谷口吉郎博士の協力者として、博士より種々便宜を與えられた」としている。
- 注9) 谷口 1938 p.10によると、建築学各分野に対する「意匠」の位置付けや必要性について、谷口は以下のように記している。
- ・建築歴史学に対しては、「歴史学が歴史的價値を相対化し時代性を羅列して行くのに對し、意匠学は過去建築の價値をも検討し、その評價を試みんとする」（谷口 1938 p.10）
 - ・建築美学に対しては、「建築家の胸に、美しさに對し的確な感受性を抱かせるものがなければならぬ。それ等こそ建築意匠の感性であらう」（谷口 1938 p.10）
 - ・建築計画学に対しては、「それを實踐化するために人間生活と結びつけ、生産と共に、經濟を考へ、この觀點に基き設計資料を機能的建築にまとめ上げる設計術に、この指針を與へるものは意匠の技術でなければならぬ。基礎的研究に建築の實踐味を與へるものも意匠の指令でなければならぬ。」（谷口 1938 p.10）
 - ・建築工学に対しては、「實驗室・研究室・現場の技術學たるのみならず、建築工學も文化の建設者たることを意識させるのも、意匠の参加せる建築工學の新しい觀點であらう」（谷口 1938 p.10）

参考文献

- 谷口吉郎 1948 『清らかな意匠』 朝日新聞社 昭和23年
- 谷口吉郎他 1956 『修学院離宮』 本文：谷口吉郎 写真：佐藤辰三 毎日新聞社 昭和31年
- 谷口吉郎他 1962 『修学院離宮』 本文：谷口吉郎 写真：佐藤辰三 淡交新社 昭和37年
- 谷口吉郎 1974 『建築に生きる』 日本經濟新聞社 昭和49年
- 谷口吉郎他 1974 「清らかさと意匠心 ―生きることを建築に求めて―」 対談：谷口吉郎・村松貞次郎 雑誌『新建築』 1974年1月号 pp.282-287
- 谷口吉郎・森蘊他 1975 『御所離宮の庭3 修学院離宮』 文：谷口吉郎・森蘊・村岡正 写真：遠藤崇 世界文化社 昭和50年
- 谷口吉郎 2015 『雪あかり日記／せせらぎ日記』 中公文庫 中央公論新社 平成27年12月20日
- 東京工業大学 1951 『東京工業大学一覧 昭和25年度』 昭和26年3月30日
- 森蘊 1951a 『桂離宮』 創元社 昭和26年
- 森蘊 1951b 『桂離宮と修学院』 岩波写真文庫50 岩波書店 昭和26年

- 森蘊 1954 『修学院離宮の復原的研究』 奈良国立文化財研究所学報第二冊 昭和29年
- 森蘊 1955a 『桂離宮』 東都文化出版 昭和30年
- 森蘊 1955b 『修学院離宮』 創元社 昭和30年
- 森蘊 1956 『新版 桂離宮』 創元社 昭和31年
- 森蘊他 1960 『日本の庭』 森蘊著 恒成一訓(写真) 朝日新聞社 昭和35年
- 森蘊他 1970 『写真集 修学院離宮』 奥田健策編集 毎日新聞社 昭和45年
- 森蘊 1973 『庭ひとすじ』 学生社 昭和48年
- 森蘊 1975 『日本の美術 第112号 修学院離宮』 文化庁 東京国立博物館 京都国立博物館 奈良国立博物館 監修 昭和50年
- 森蘊 1981 『日本庭園史話』 NHK ブックスカラー版 日本放送出版協会 昭和56年
- 森蘊門下生一同 1989 『故森蘊先生著述作品目録(稿)』 自家版 平成元年

参考論文

- 田中栄治 2015 「住宅における建築と庭園 —庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 堀口捨己・西澤文隆—」『神戸山手大学紀要』第17号 pp.9-40 2015(平成27)年12月20日
- 田中栄治 2016 「庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 谷口吉郎 —昭和前半期における建築家と造園家の交流—」『神戸山手大学紀要』第18号 pp.59-87 2016(平成28)年12月20日
- 田中栄治 2017 「建築と庭園の結びつきの視点 —森蘊と堀口捨己・西澤文隆の桂離宮意匠論—」『神戸山手大学紀要』第19号 pp.69-104 2017年(平成29)年12月20日
- 谷口吉郎 1938 「建築意匠学・序説」『建築雑誌』vol.52 No.634 1938(昭和13)年1月20日 pp.14-23
- 藤岡通夫他 1953 「森蘊氏提出学位請求論文審査報告」藤岡通夫・谷口吉郎・加茂儀一 東京工業大学
- 森蘊 1953 『桂離宮の研究』東京工業大学学位請求論文(博士論文) 1953(昭和28)年12月26日工学博士授与
- 森蘊 1955 「修学院離宮造営に利用された建物と地形について —修学院離宮の研究(補遺)—」『文化史論叢』奈良国立文化財研究所学報第三冊 昭和30年
- 森蘊 1983 「建築と庭園の結びつきを求めて」『建築雑誌』vol.98 No.1211 1983(昭和58)年9月号 p.20

